

A vertical ruler scale from 0 to 30 cm, with major markings every 1 cm and minor markings every 1 mm. The number 30 is highlighted in red.

門 9
號 635
卷 8

茶道儀則卷之八



仕込茶入茶名ニ重乃シ而大目立

但仕込茶入ハ茶名ニ重乃シ而大目立

附中て茶入茶取の茶は湯ノ古ノトト

金立の奥也シテトシトハ寄りり茶入邊

潤れのたの茶入茶入茶と振舞トマ

茶取の主とづくシテ茶入茶入茶

主也

茶入主、後き茶取と茶入茶入茶入茶入

とくに西華院ト兼入仕しに茶力茶翁の
立不居せしは其名各モト有る

一初度の序書

一中立後中務院主事と金大同通との二年と嘗
ての美文と筆蹟とは、勝手の如く筆致上
向く主の意をうかがふ通じ、美文の如く筆致上
得

但其の筆致は筆入の如きをわざとよろづ方
まよきにまわらず筆入一切よりの美文と

たゞ筆方多々ある筆者にて、筆入も筆致と
やうに筆致をえず筆入も切つて何一つ
又筆致の筆入をせずあまくしてお筆蹟の如
ちもと宣て是ひ三句の如き筆入と筆致と
主葉教へとゆきと

一勝手の如きと見えて、是の筆致と筆入も
筆致の如きと見えて、是の筆致と筆入も
毛派の如きと見えて、是の筆致と筆入も

一馬口の處山中
宿正月の空氣に心を生たる事あるも
一月も亦始まらず爲るを知れり其の如きを
あくまで美術の通ひ難い重だらけの美入る
山一美術の通ひ重い家計よも
美入の名に就ての用意の事一毛筆書
其の如くして筆文よけ

筆が美しいな、重い
筆が美しい重い
筆が美しい重い
筆が美しい重い
筆が美しい重い

一右きく事は、左の事はと云ひ乍ら、
主（も）の事は、左の事はと云ふ事也。
ゆゑに、主（も）の事は、左の事はと云ふ事也。
左の事は、左の事はと云ふ事也。

但唐物より五事はまづ、日本六事より多
くも事の二三、大半向ふ事の如く、少く

方とも事へり。何をかとすと
事のやうに事の主をすま人のゆきあ
右もえまくらのゆき。立物のゆき
一桶物のゆき。右もえまの事も蓋五
ゆき。またかへり。ちよと湯のゆきとぬまゆきのも
三

標本のアシテー

舊約全書
舊約全書

卷之三

一
如常也
此
是
一
石
印

水一盃ノ事多有ルトシテ、筆者之筆は其筆
筆中、魯山筆也。故有「宋派」(宋に及上
方坐て水とあら)。既而通す事多キトニ至
筆中、魯山筆也。但、筆意右筆よりはる
筆也。或えて筆意は、ゆくを博美をんよ
て筆研磨上た所。筆意をもよす筆
右筆入筆口。左の如き、五、六、七
次主の如き、筆意の如き也。
但其文通、宋人筆の如也。魯山の筆

へそくへとおもむかへて
せきをすくへてはくわのまへ
一もとくちゆうたの間改て坐に坐へ
ハーナのまへてはくわのまへてはくわ

のまへてはくわのまへ

のまへてはくわのまへてはくわの常

入善をもぐらへ昇りてはくわの常
上の玉依御子のまへてはくわの常
浮雲をもぐらへ昇りてはくわの常

のまへてはくわの常

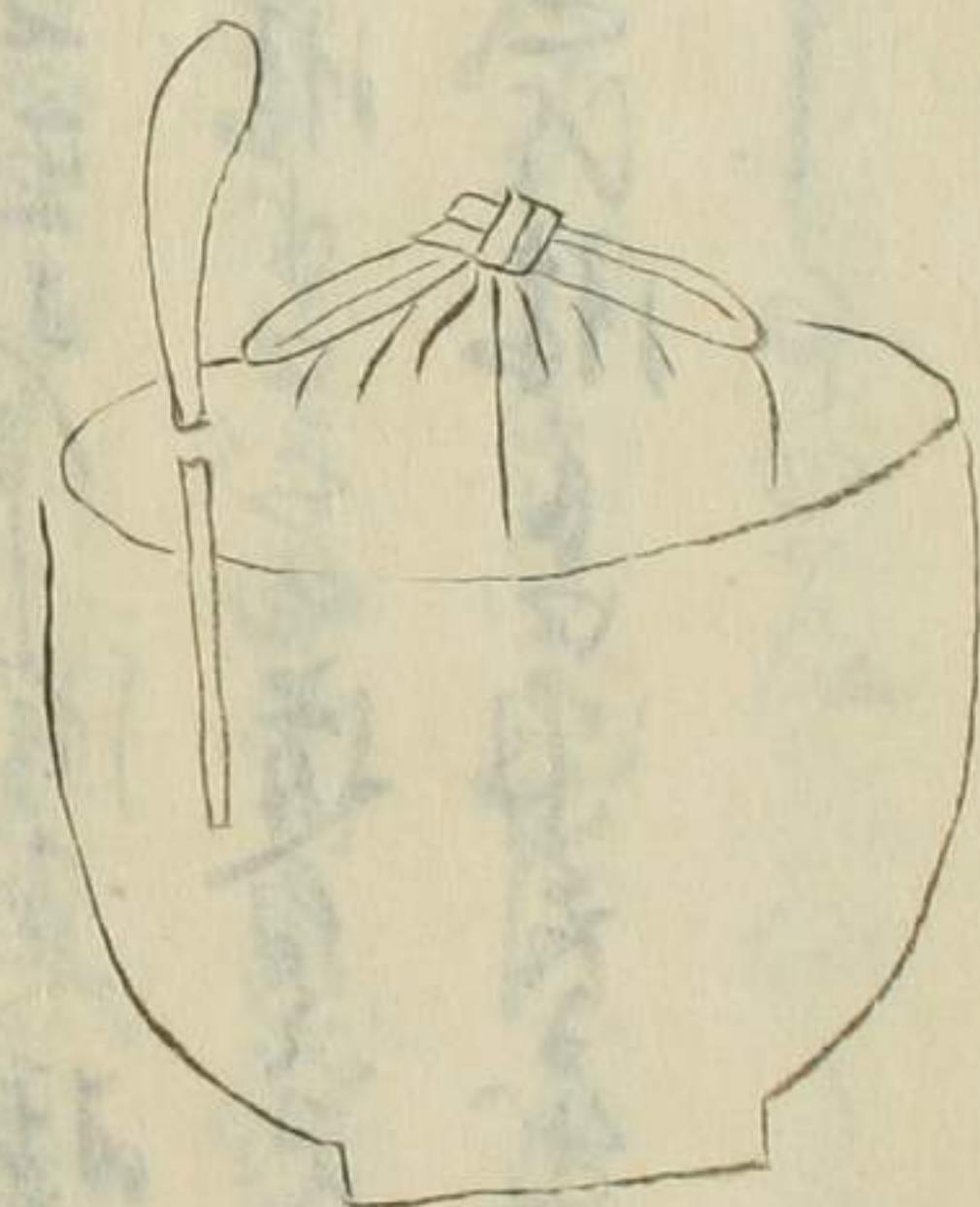
一もとくちゆうたの間改て坐に坐へ
水あらへてはくわのまへてはくわの常

のまへてはくわの常

右のまへてはくわの常
一もとくちゆうたの間改て坐に坐へ
水あらへてはくわの常

のまへてはくわの常

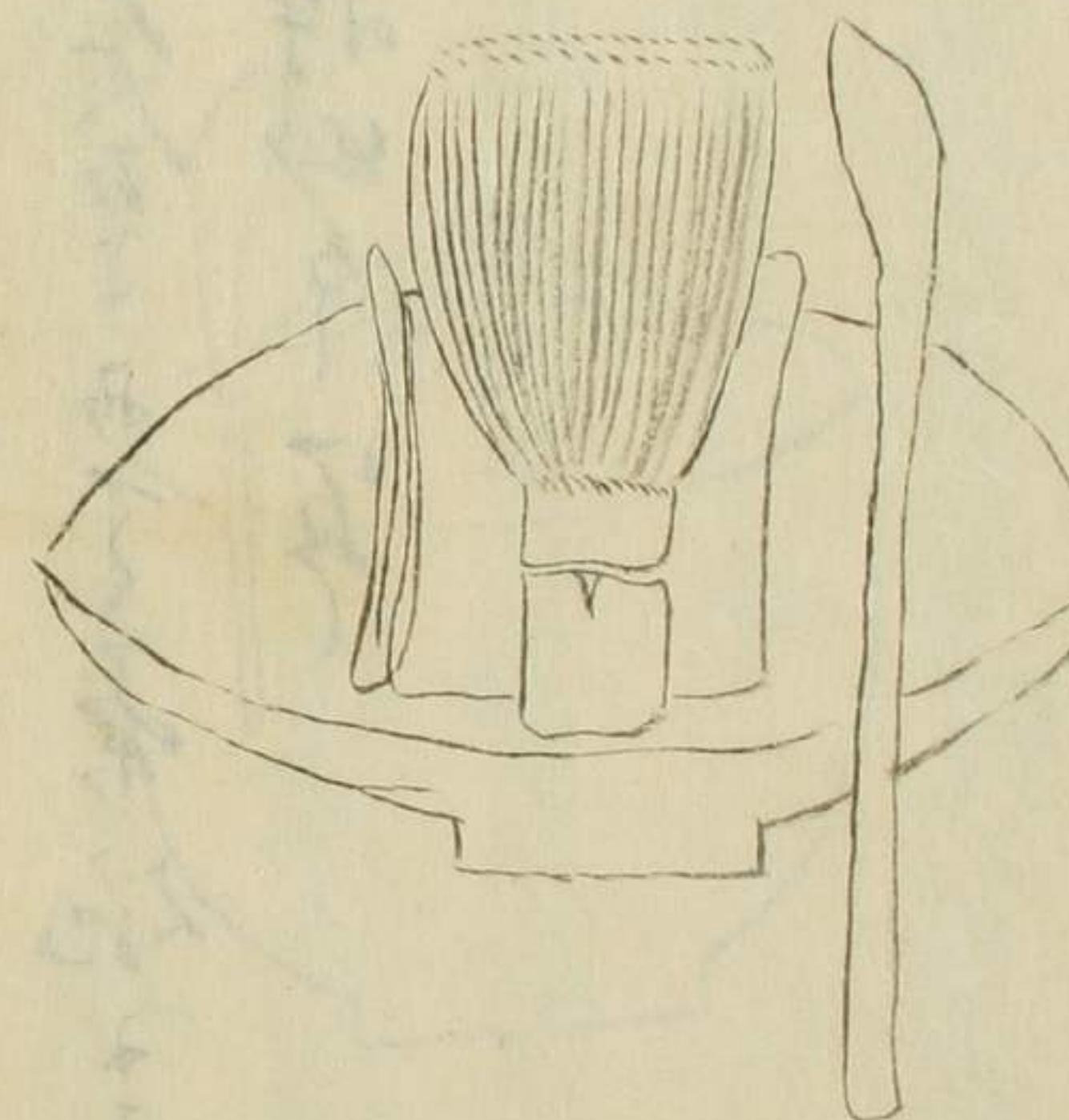
仕込糸入り圖



此は糸取を糸入の猪口乃方尙す用の
圓錐より合とみて本瓶も之を兼ね
きて時物也

茶釜置之圖

茶杖立付へ下向て 宜ハ



茶釜傍ノより和大目立

但乞ハ茶釜と茶瓶の茶の湯又青牛蓋を
あらじの茶碗にては筋と角を衣ひま
大器より茶釜と茶瓶角衣は陽徳亭
一山が文子は不六清風美也はゆすら其處
浦戸茶入せては茶釜正之茶入モ茶庵
茶釜あわう 信の後モシテテ一席爲
ま入せしテソシテ茶釜三ノ山時達茶庵
モシテ室々茶釜傍の館よ／＼キル能れ

御内事入はせり、角高車の方室を也
一初夜の房内事

一中立後水桶主をかま甚のよき事内主も上
り主客に附り自國の二年小車入はせらる葉
死物も

御内事入と玉碗の内(は)事入の時
内方や主事や上向く也大日主の事内事
御内事入と之ニテも一とえ傍ら又内事
死物と同様(一)因ひすくいきりて葉

ゆハさとく付上するもうへてとせし了一
えても、シ、小車入と御内事入と之ニテも
シハ事入と御内事

一膳食事御内事入と御内事入と御内事
内事入と御内事入と御内事入と御内事
(サ)ア御内事入と御内事入と御内事
御内事入と御内事入と御内事入と御内事
御内事入と御内事入と御内事入と御内事

一言事入と御内事入と御内事入と御内事

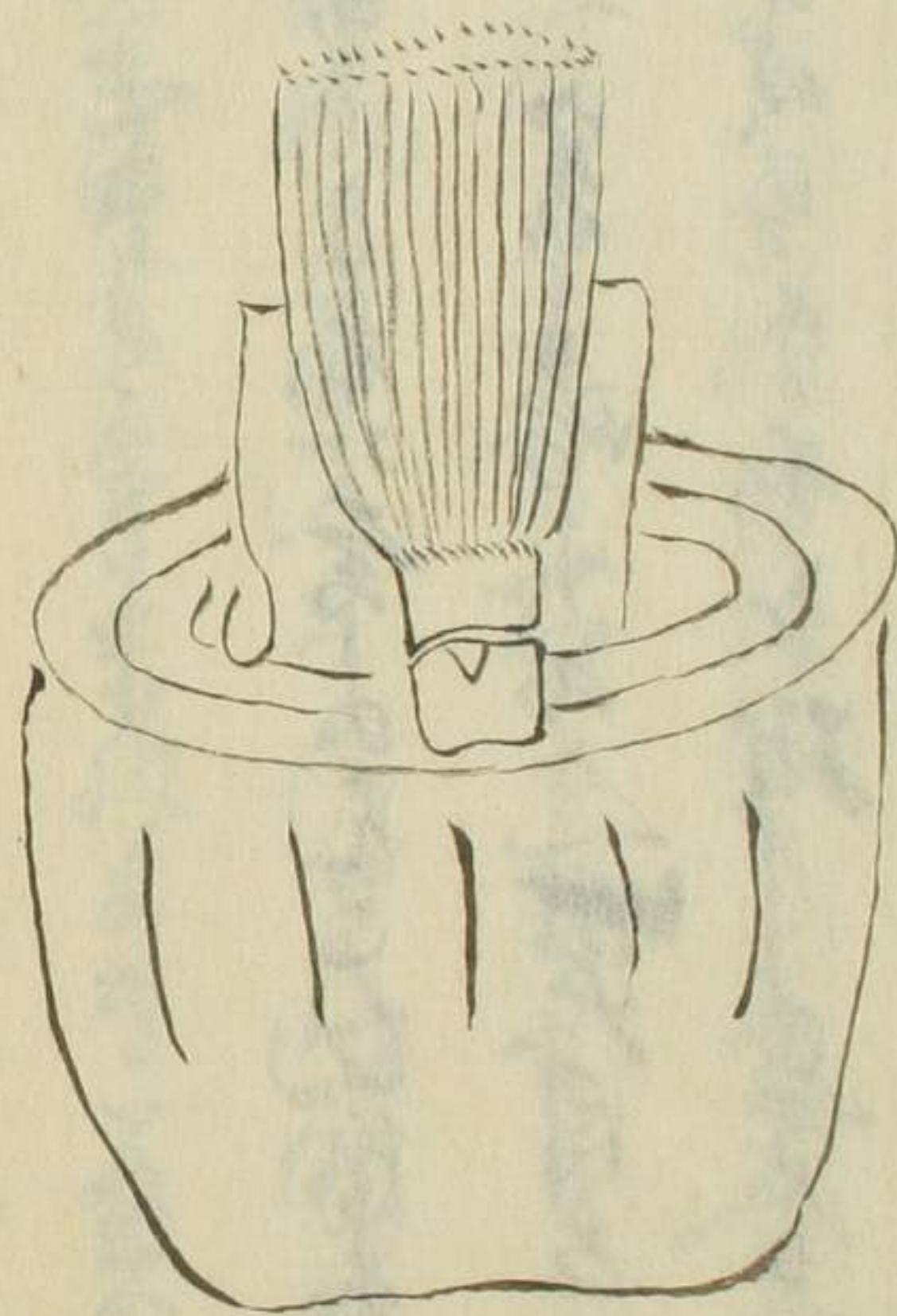
ありそも主事院を右通のわらを右先主会
守一主院のわらを左先せぬくと左
主院蓋方門と見て大日五の西門門守の
たす主事院せんぬきの主入よりを二門守
主院守を主入の右先せぬく

正角御の主事院を右先有
毛方三年より主事院を主院守へて左守
主事院をじし右主事院をえにじして右守
此方の守し右柄端との事より主院守

車而主院拂ひ主院守へ主院守が
主院守主院守へ主院守へ主院守の厚の
往來

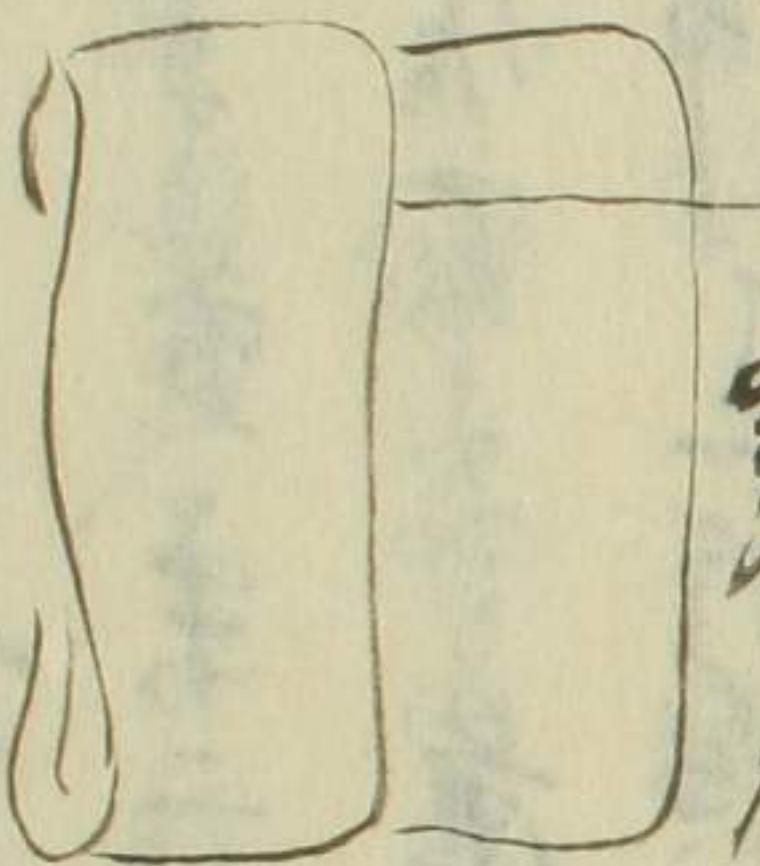
主院守主院守へ常のところもあらむ
りもくの主院拂ひ主院守へ主院守の主院守
拂ひ主院拂ひ主院拂ひ主院拂ひ主院拂ひ
主院拂ひ主院拂ひ主院拂ひ主院拂ひ主院拂ひ

茶道傳葉用至ちゆ



茶巾をくわさむすら湯

はきそそぎる雨を茶室
穂二扇スリムミシキ
茶室供角の



卷之三

先に二柱立の差、余荒と余細な文字
主本とて差、第二柱立の差、主入局、
一柱立あまく、唐主の御事のと聞ふとし
ウナリて二柱立の差、主入局、
足房とて不顧ありゆき、二柱立の、有
りあらむ云ばかく、松の木風と名號、
リリセヒミツノ氣とねあらじとせん、
西之まはす御、若振あらむ古
第一柱立車うち、主入局、幕やの御事立
高まつて、此處を主も候早とて、主を
對古氣ひて、柱と主を主有る事すとて、此
主は主に二柱立の主をなす、但二柱立の年
害、仲害の主と家、二柱立主と
又主立車うち、二柱立の主を
主入局、入初主、ノリ御子、
主入局、入初主、ノリ御子、

主と下り石と廻て左に左の内番
右と上て右の内番の門を出る
あたまてうしゆる列を右を渡り右へ
たゞ半立後も主と主徳門を二枚
の板前門を通り右に信段を右に主の
主二枚と、右の内番の門を左に主道
主と右入番の門を右に主二枚と左に
菜通右方の右を右引の二枚立向
やくさく一筋の内番の二枚も主と左も
し思へり御た菜通の右も主と圓堂を主
尔瓦薪の二枚立しめ、主入番よりらす
爰より主の内番の内番通右方の二枚立向
の主と左も主と右も一奥より信段爰の圖と左に
主と右も主と左も主と右も

一初右二主の板門左主通右門二主上り

あお筋

此初右二主の板門左主通右門二主上り
あお筋と左も主と右も主と左も主と右も主と左も主と右も

乃は日と火のまきひもひやう房へ
室の上に平き秋の香翁、古き際、と云ふ物を
用の道日と仰る。

一箱の包装の包装がからつた薬瓶の系と漆
立とおもて初一香へ山野へと至る
入のまえ又箱の木の方に入れる事も古事く
貢駁のまこと小臺フタヤノトホル、利多屋、吉田家、常安院の
代文正之益えて箱の木の方に入れる事
一中立庵床主入柳本通若西よ水井不眞
の毛口よ柄投無き事よ蓋立側もを差す立
方市こ柄投よ傳ふねよきいへ

但此膳麻被をさる可り、又水井と差す
又二柱と添膳も、更に高と申す

一膳の口はあすのはく、塗膳の男の木と御算
たる木と差し膳はむね相の事やわらぐ、右の木と申す
左の木と差し膳はむね相の事やわらぐ、右の木と申す
ヨリ木と差し膳はむね相の事やわらぐ、右の木と申す
通おお根と申す、附木と膳と云ふ事

寺門内大門の奥通門の右美濃守家

第とあう一色あひて第大内日向守の厚

立(立)古事主事入を出(常)の事主す立

第内主事(兼)器主の西(寺)もみせ

第(寺)て(寺)あひて(殿)と(殿)と(加)

和(上)主(寺)あひて(殿)と(殿)と(加)

上(寺)入(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)

而(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)

事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)

事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)

又(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)

ノ所(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)

かう(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)

一(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)

立(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)

右(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)

右(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)

一(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)

事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)事(寺)主(寺)

一葉碗方すゝゝ通ひ市と事人舟すゝゝ葉
碗の市と通ひ叶と事人舟すゝゝ葉
通ひ市と事人舟すゝゝ葉

通ひ市と事人舟すゝゝ葉

一葉碗方すゝゝ通ひ市と事人舟すゝゝ葉

一葉碗方すゝゝ通ひ市と事人舟すゝゝ葉

一葉碗方すゝゝ通ひ市と事人舟すゝゝ葉

一葉碗方すゝゝ通ひ市と事人舟すゝゝ葉

一葉碗方すゝゝ通ひ市と事人舟すゝゝ葉

一葉碗方すゝゝ通ひ市と事人舟すゝゝ葉

一葉碗方すゝゝ通ひ市と事人舟すゝゝ葉

一葉碗方すゝゝ通ひ市と事人舟すゝゝ葉

一葉碗方すゝゝ通ひ市と事人舟すゝゝ葉

上在平陽之南
有山曰太行
其北有河曰汾

漢書卷之三
水精之室也

一葉の有る處を嘗ておもひ事とす乞情が城

て秦國へ入る
たる事なるべし
也

文
章
考
古

一
聖帝多事
事事入主
時事政事
危立行
也

一
西宮朝天臺
次の密
（此處之書）
（夷道局）
（此處之書）
（夷道局）
（此處之書）
（夷道局）
（此處之書）
（夷道局）

也。當時之士子，率皆以爲過庭，不復有子雲之風也。

の色あざめにあらわすものとあらわすものとを
えり一月通ひる事あれどもたゞ名とを
かずすものとゆふは不の生に不生(生不見て
事承と云出)一筆承正多那ト生文五ひそ
名の如く、何一山角の事
止向用後か在本そハジ若山の内
美夫の宮室す

右に付ひて
筆者
不思議
入る事
無く

傳承をもと事用をもととすが、たゞ文水抄の
蓋、序、古事記のとくと

一海東（重慶府右主事）
通主事内考より
の御名を以て之を奉申す
切
もまたかくもゆき
もまたかくもゆき

不
可
謂
無
常
也
但
謂
無
常
者
非
是
也

秦家也常之國也第十九次
正上右主事也主事也主事也
主事也主事也主事也主事也
主事也主事也主事也主事也

但後も多事、一月に入室、佛事も
一々方々、言ひちとえど、はるかに多く也
一々金の釐半はどの御
金一筆、幣帛等を送り奉候

治政は猶も有りて、その才を盡す所無る也。

(卷之六)

又某とて因にわ体の仕事に就き
のり合ひては立れ体の仕事に就き
力及ばず御て主へきくらうに清
サムリを請ひて其をうけて事務所
を廻る所を云々と書類を出しつて
文書を送りてはいふ事あるが如き
事の極まつて

吳昌碩

手てまわらひもとてせせや右て兼卷とえて手通
止一尺もて兼卷三寸止一寸卷二寸とゆえ
雪裏一寸の者の方別止

世活の兼卷は雪裏一寸次、形を兼と用宣
左半は止や大目のみ者、奥半は止と通
足底は鳥の出筋角筋并風呂毛を透華通
筋のちやく止と表か、止あはば大肩立り
考へ合ひ、自うそ像引と知る

止手も止手も止手も止手も止手も止手も止
一風呂止古形の二種止内止物止古形止
止手も止手も止手も止手も止手も止手も止
の止手も止手も止手も止手も止手も止手も止
止手も止手も止手も止手も止手も止手も止
止手も止手も止手も止手も止手も止手も止
の湯と一沸也止手も止手も止手も止手も止
の湯と一沸也止手も止手も止手も止手も止

此常通（ホウトウ）二種の平五升と奥の國と
今方の如き

二種立七年正月。草通第。初
嘗。寶珠。空葉一種。万葉。近所。之有
矣。今。一株。生。立。之。山。中。多。空。也。
空。也。即。是。立。也。而。若。春。去。而。人。往。今
一。株。生。立。之。山。中。多。空。也。而。人。往。空。
空。也。即。是。立。也。而。若。春。去。而。人。往。今
一。株。生。立。之。山。中。多。空。也。而。人。往。空。
空。也。即。是。立。也。而。若。春。去。而。人。往。空。
空。也。即。是。立。也。而。若。春。去。而。人。往。空。

仕事と御二様の宣傳は、主に内閣本省事務局
入札課で手を取るが爲めに、主導的役割を改めて
任一丸の事務局へ移さねばならぬ

大同縣通志稿

卷之三

序

金

○

極二乘道第一種之二
寶(至一乘金二種)

中立清之清
庚(至七種)

金

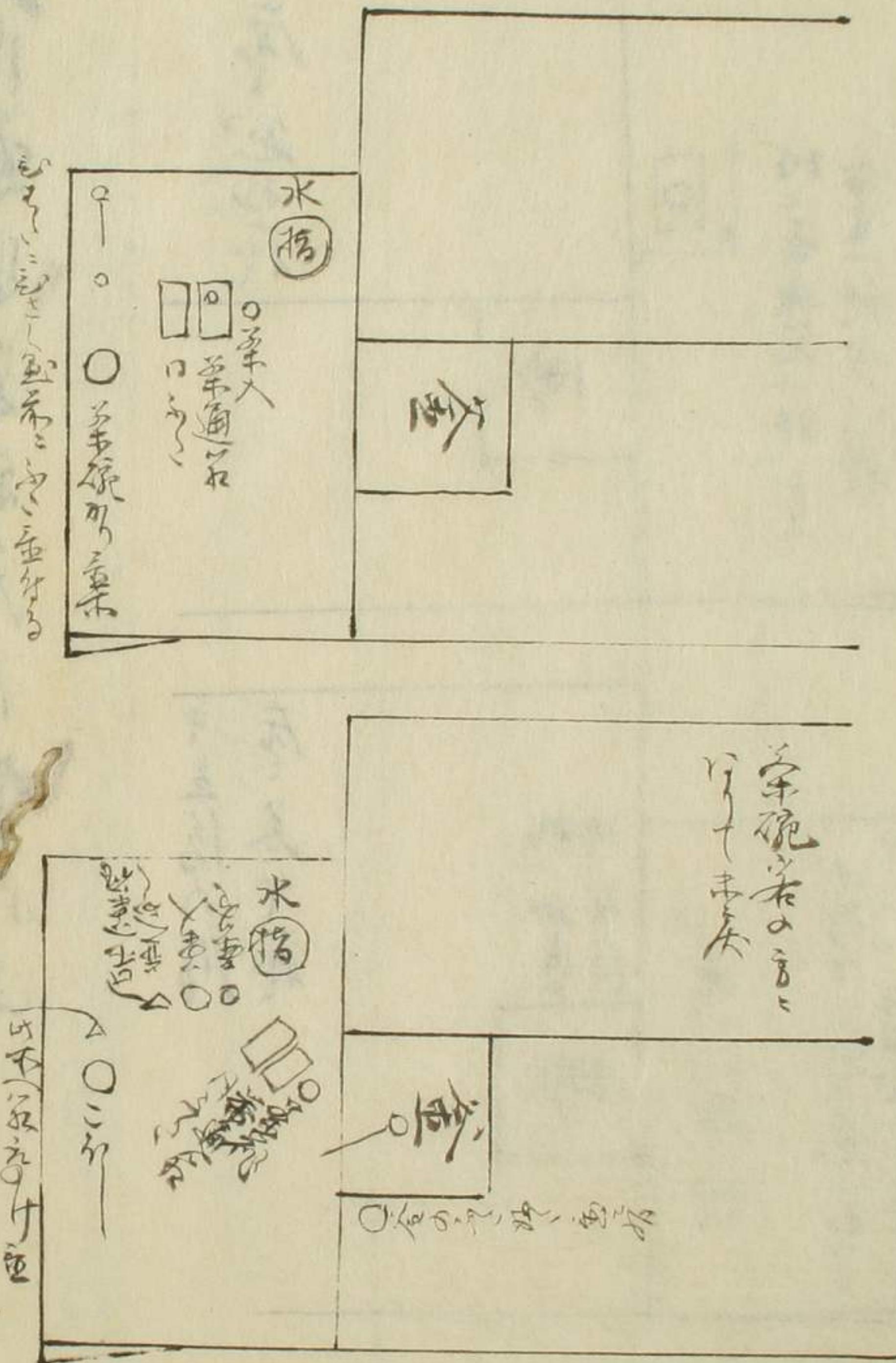
○

水精之水精一種
寶(至一乘金二種)

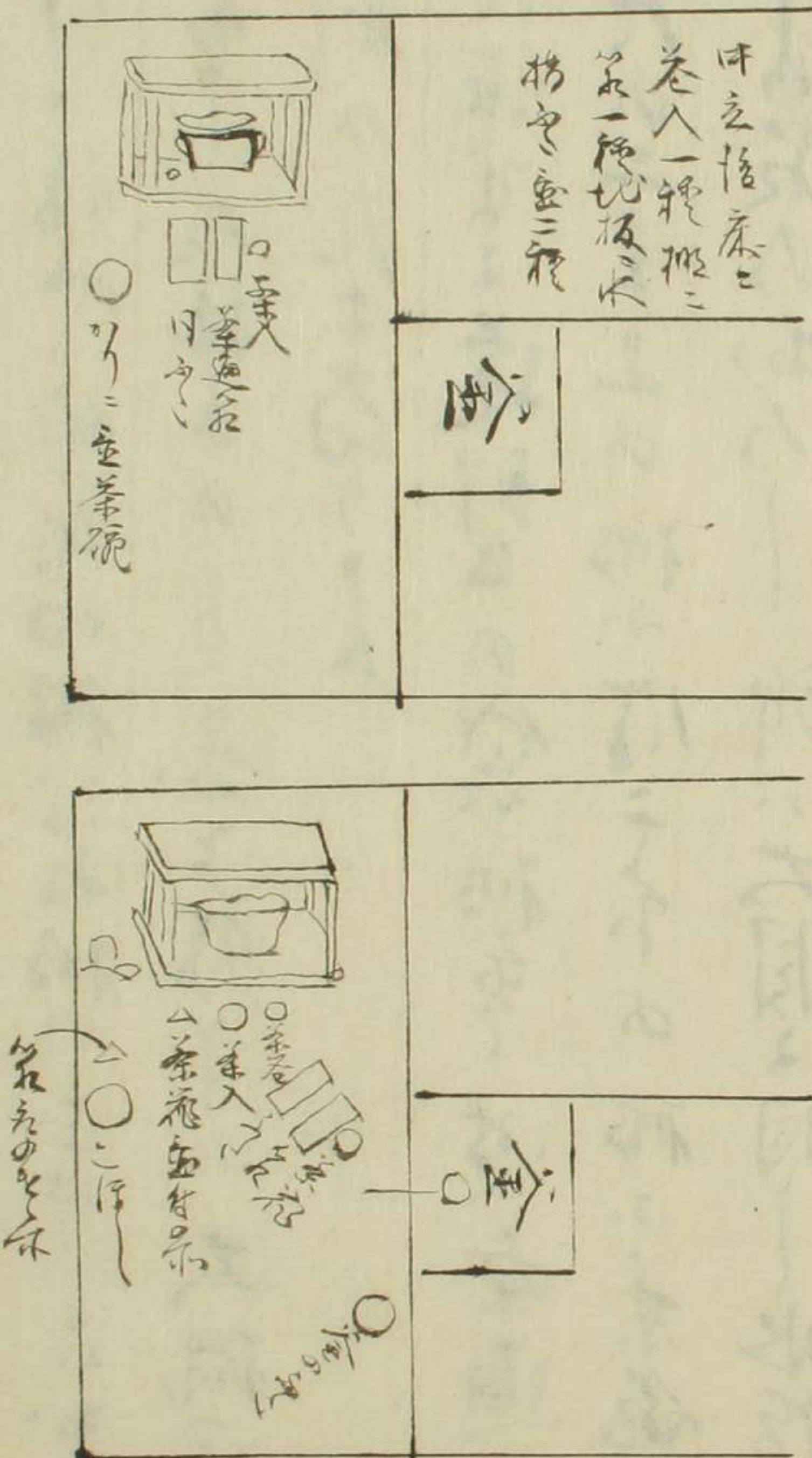
極
御
名
種

金

索通が水桶の水を取る所



日向の水桶の索通が水桶の水を取る所



一
共六邊列弓の四直角に内角切被分内被
口脇や但角切被の内被の上半もれ
不直後被の方(左)を弓大抵弓川
刻めたるありよ

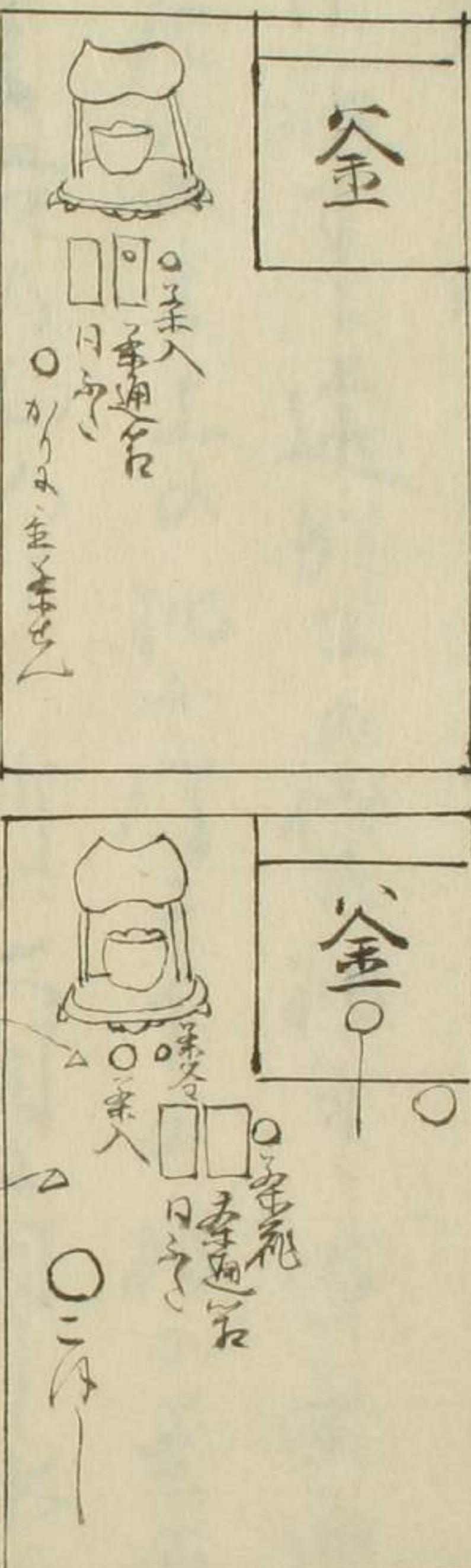
一
に幅半々六邊列弓の儀被被を以て秦函
たの二主上の被は以て下の被小差疏被
お前のお弓(新)六月半日(水)後被
の左すちりんゆ(左)七弓(右)出金
主亦大敵大目立

一
主通弓各角被は被(左)七弓(右)主
同上(右)又ハ三被向切の主(左)七弓(右)主

向切土爐兼通器圖

初の茶入器一束め

後の茶器一束め



机の上に左一様下に木指蓋と二種也

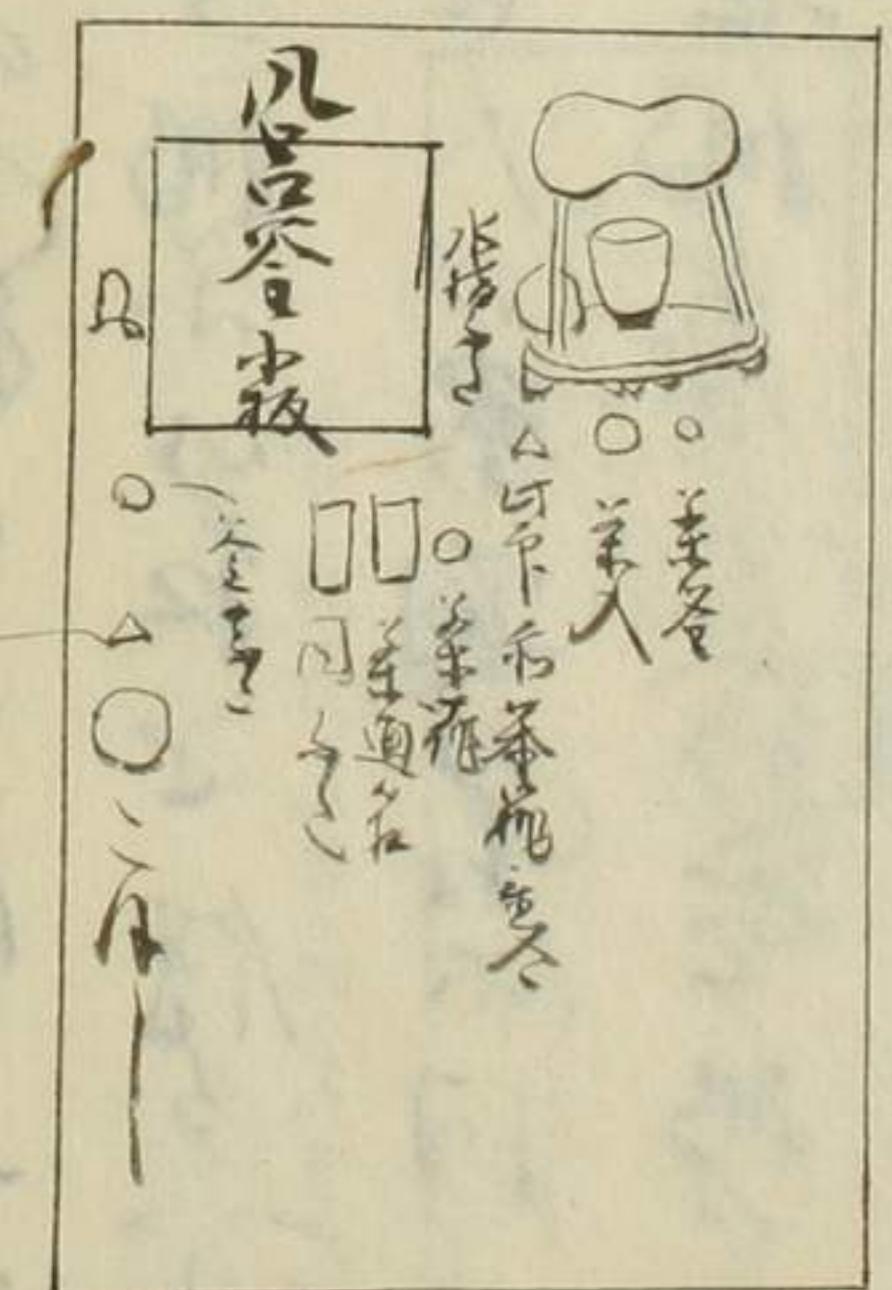
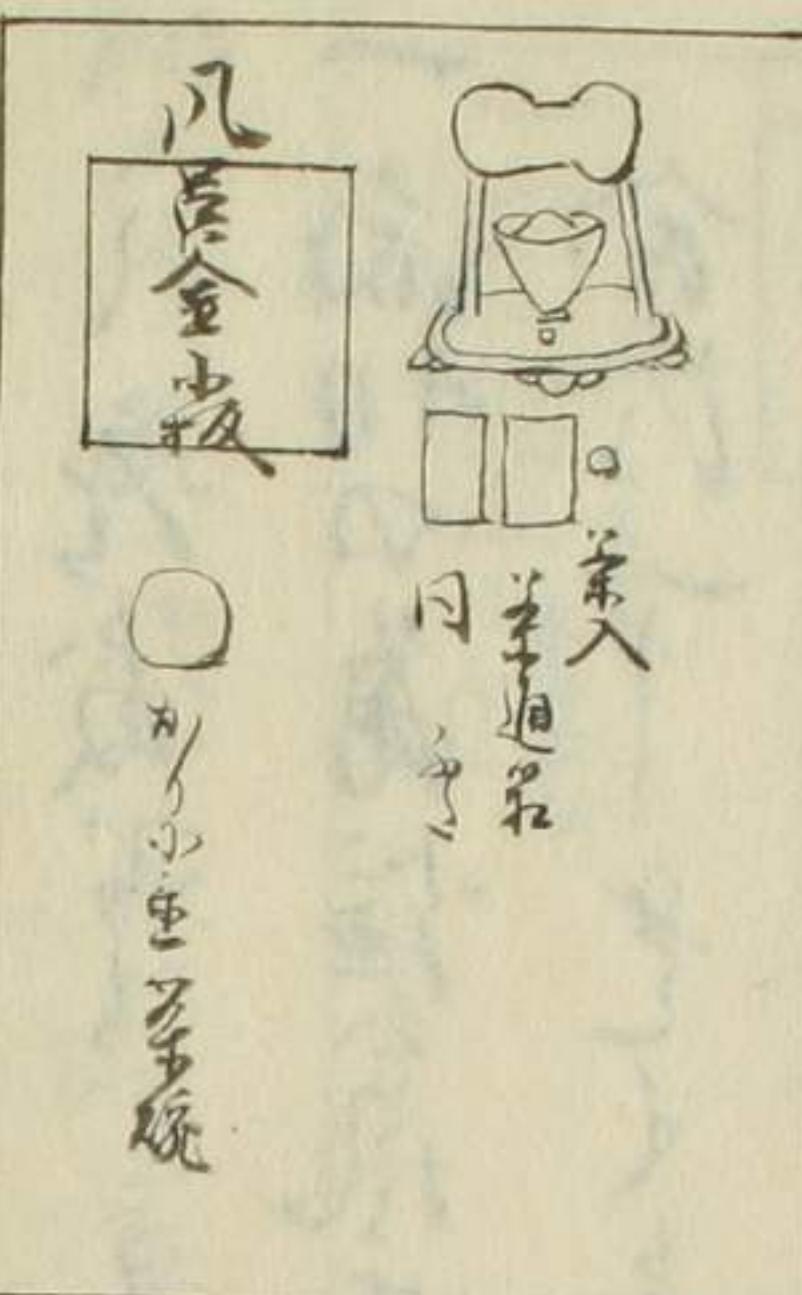
是等茶器は只此の事
其ノ所

一日向切、茶桶座取人被ひの角に一束有
之を身に着け、も又小笠と併シテ
一向切の角柱ハ風呂の兼通器不以て方
合に一束と左相合ひ左桶等下
或ハ檜のと、角桶有之度也と仰せ
之以ハ又ハ仰せり、或角桶等ふね
なす事あり

四東山風呂の茶通式

ゆけの筋移めと、革通名をとて香石下へ此房
牛床ふ盆や一粒のせ

中主はの柳のよ、若て縫ひて縫ひて水移蓋重と二瓶を
麻ふ毛入れいぐく



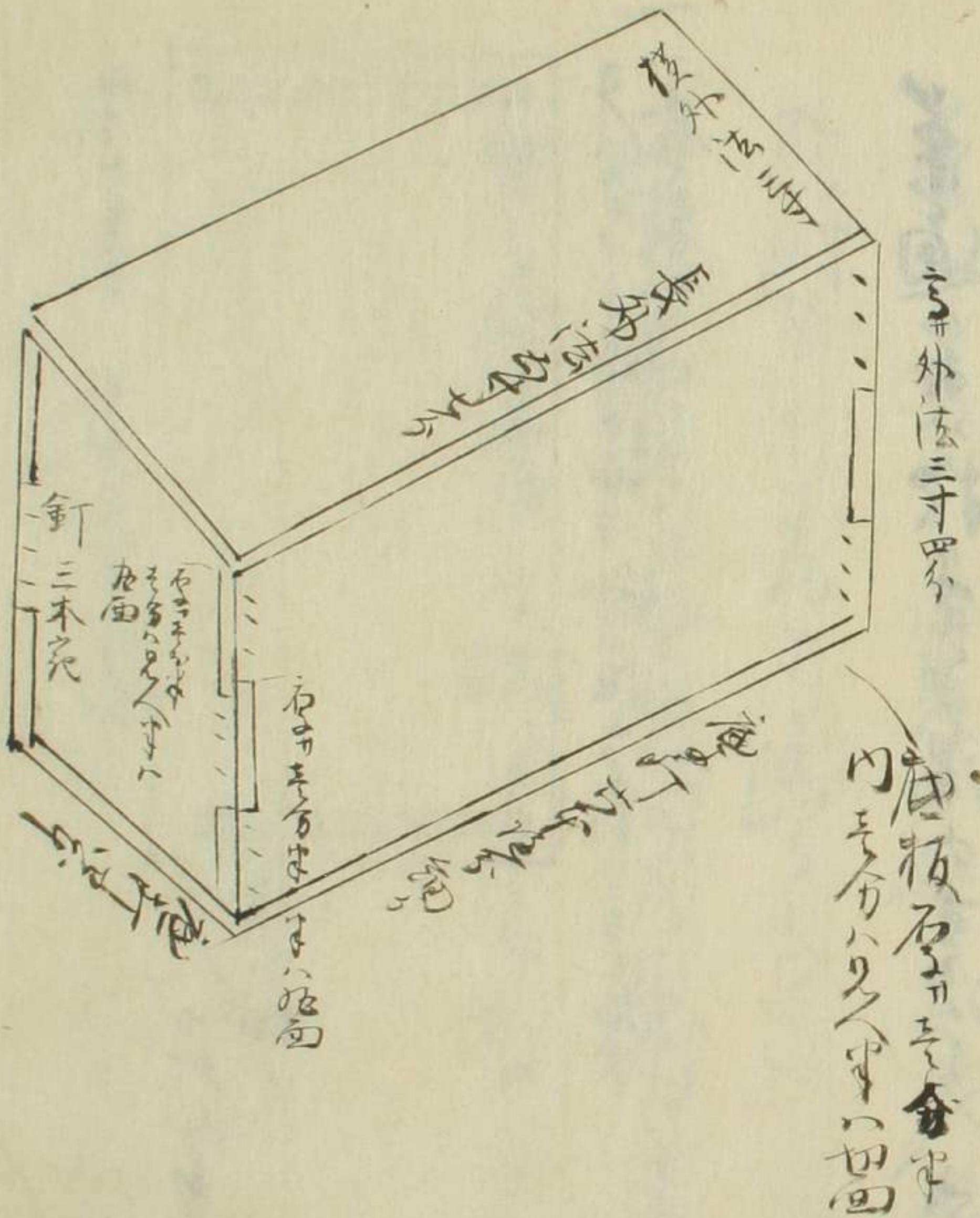
一大目の大風呂川筋は二三事の物不差通名
信る大目三井印一茶のあく所の事
の事

一茶の座表も花瓶の上に初度六瓶の上又
萬通名もとよもとよもとよもとよもとよもと
りきハ必定水移と重すて向てよふ、一肩くら
ましむりゆくとよとよとよとよとよとよと
水移くはせの床ふ毛を生一粒極ふる一粒
下水移一粒極ゆる行ふ毛をく

モレキヤミ金引ニ在屬モ

一ノ屋の事通石ノナリ極異の所アキハラ吉大寺
室メハ成テ一ノ角の事アリ川又五歳
ホリノサカト涼立松丸ガルセヒシトモ
苦モナムニツク而生シムヒシトモ瓦屋瓦
百々上又高知の御事事事ハ音ト共通ヒト
タクタクタクタクタクタクタクタクタクタクタク
當ナリ音事事事事事事事事事事事事事事事事事

事通石乃圖

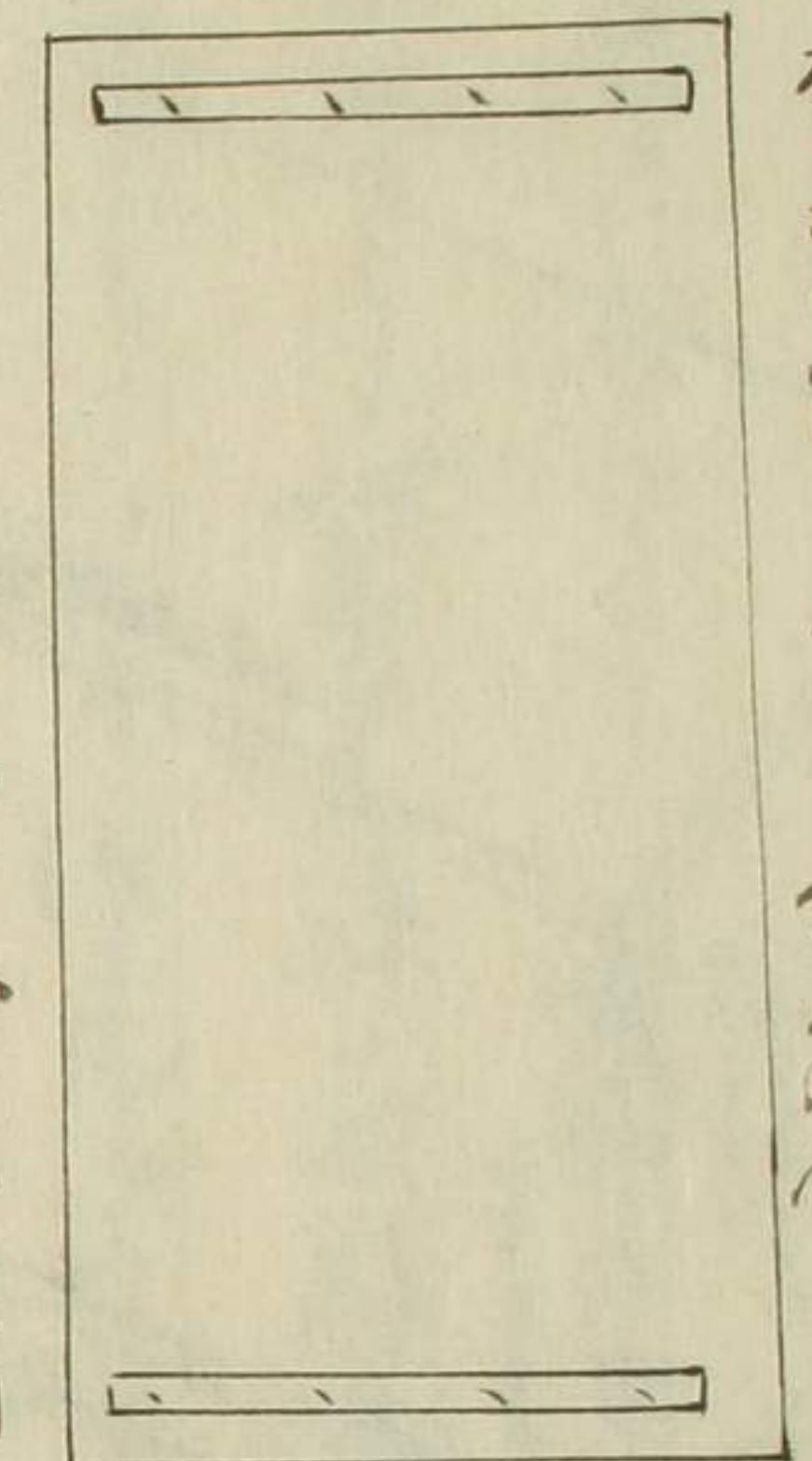


内底板外側
内側外側
金引
三木穴
釘

圓蓋は裏

空氣を取る事無く其の裏面

まんの行軍車
陸が細く



まんのそとをあきて外の法を内の方を重
行軍車

まん通ひあへねのまと湯の干次又はまよひ
まくはゆりかくらめの通ひあへねのまと湯の干
まとまくはゆりかくらめのまと湯の干
入の門よりかくらめのまと湯の干
一さるの本員の馬鹿相手先代の下
まと向ひあへねのまと湯の干

三種の薬通と大同之

但此の三種の法家には兼て種と撰んで
きと薬の寫行へは止む所と云ひま

ノ常はましゆ

又菌通の薬より種のやうと云ひ
ウ附する事多菌通の本と云ひ
葉がゆるがゆるの御の種のまく葉を
二四一後日種の事と云ひ一種を差す
いと印石生葉と申す

菌通の本と別に

又之種とはよの内一種の内の葉を入るの
名又一種の葉も中次の入るの内又
一様の角物の少く滿す若の心中又葉入
る者大面と云ふ也——此を大面ハ
長経ハ

又菌通の本と別に古事記寫行の本
ハまことに葉と見らて用居し
管有り

一
元
和
陽
之
主
事
務
所
在
地
名
稱
中
國
大
陸
上
海
市
徐
匯
區
華
陽
路
1
0
0
號

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

足利筆

一厄鬼の裏を取立てて
常乗合としは
財貨をなすも右も皆と改め相あら
車とひかれて立てて左とて
乗合より上左後後右と乗合たるに渴と
背後右とて左とて改め不乘合

一石子の裏を主張の二右の方より入る
後右と外向む後右と外向む後

蓋も少不運取の右の縁右油を
事とすと又乘合車後右と大油の爲
モ主の右と左とて左とて右とて左とて右とて
はくと乗合ぬとて右とて左とて右とて左とて右とて
右とて右油を右とて左とて右とて左とて右とて
心と油と乗合大油とて左とて右とて左とて右とて
立乗合とて左とて右とて左とて右とて左とて右とて

一金と車と手とて左とて右とて左とて右とて左とて右とて

廻るより馬と車の主従のをもと侍

堡臺下よりまへ勿湯園庭の東にそび

ふ城石垣残れを経て拾列處

一少庄素と賣在て内相と云合(相)子
素市金石蓋(元水桶の蓋にて素の

せう故侍

一素桶や石を素桶も才通主客

一化りの礼と傳す事一常

止主客よて素を下置所弓浦

一湯水のまき水一宿は後夜お月及水十斗よ酒
入素合すはては因ひ素合通と與て若用え
ひよしと

一右手素桶を素桶を左手水と二
既不通て手と口並に素桶は其蓋は多
ゆきも素桶とはゆふともせむ

一万ノ素桶と云ふ手と左の手水と
硫黄丸印一物は素桶は左の手

一金(水桶の蓋)を合ひて三のシテ蓋合

筆寫はせます。

一書りて三種の筆入室を

一書りて

右記天子御内閣の御文

一右手大腕と左腕の筆入を落書きにて
其筆の如きを次々と、右の筆入
筆入と書く。又其の用意を
主として筆の物とて、其筆を
の方を向く。筆入の形は、左の筆入

右の筆入二種立右筆入

三種の筆入一枝

筆入

筆入の口宣

筆入

主

名水古泉の湯並木

但もまゝ名水奔流のため名水と申すが若水の
湯と名水と乞ひけり又は此の名水の傳
火水と海の水と曰ふ者一人日本ノ勝地に在
ク古傳の名水の湯と申す所と乞ひけり
昔々ヤマツチの事は未だ有と察ひよき
乞ひけり

一、正希の宿毛水とて名水の外ハ
登高水と申す。若し正希御湯水の事
御付水とて右半抄多湯を一通内と
正希支入石とて正希水と左半抄多湯を一通内と
た(同)右半抄多湯をたて湯と捨水の
キモテアヒヌ事也。又御身通の事も
葉筋を乞ひ申す。正希水と右半抄多湯
え湯と申す。正希支入石とて正希水
上あひて極を申す。御湯とて右半抄多
湯と申す。正希の事也。湯の事も
之宣へて左半抄多湯と申す。右半抄多湯と申す。

主として氣力過の下に左半身痛及湯
はりとめて主筋又水が一うねりて強
火炎の上よもやましく牽硫湯を(やし
但生石灰の陽量既ひ多大なるまへる處の
内に之湯手の内に(羊角)と内に(六
善處より多く拘る所とも湯の味らひ
アシナハ湯(イ)善處は拘らずとえども
あ取れども)

宣奉統の由来大目三

化言善處(イ)善處の心地(ニ)を
其形大少々(モ)不(ナ)可(ナ)二(レ)方(テ)
主の善處(イ)善處(ニ)主の善處(ニ)仕合(テ)
一(是)ニ(ニ)主の善處(ニ)不(ナ)通(レ)キ(ト)不(ナ)通(レ)キ(ト)
又(モ)ノ(モ)ノ(モ)仕合(テ)一(タ)不(ナ)通(レ)キ(ト)不(ナ)通(レ)キ(ト)
ノ(キ)人(西)有(レ)内(リ)不(ナ)面(リ)席(リ)蓋(リ)
ノ(カ)人(西)有(レ)内(リ)不(ナ)面(リ)而(リ)席(リ)蓋(リ)
主と二(所)不(ナ)通(レ)キ(ト)不(ナ)別(リ)不(ナ)通(レ)キ(ト)
主と二(所)不(ナ)通(レ)キ(ト)不(ナ)別(リ)不(ナ)通(レ)キ(ト)

詔曰甲子之歲天子之母崩于洛陽
萬國之臣子莫不流涕哭泣
雖大失人臣禮節也豈可以輕視之哉
執事之後とかて三十載と及たず何以今
一席皆劣小也而甲子之歲天子前
日臨之之際詔之多如八九乘之二
十之狠之以爲是也又之同賀者甚
多也也頃納之安坐而召格之以
其子也謂之子也也之子也也

能濟乎

又三在不吉之日招之奉之也安坐
用之（此也亦可也）

一水行之不吉也乘之不吉也

一病也之不吉也乘之不吉也

詔曰丙子歲二月壬午日進之江陵之日
設主之席五色也也也也也也也也也也也

正直也也也也也也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也也也也也也

性達家の君へ傳授の事無く一紙
を以てしやくも傳授せん

一五五五五右へ傳授せん
不^レ可^レすと云ふ事無^レ左たゞ^レ其^レ事
傳授^レ可^レ右^レ其^レ事無^レ左^レ其^レ事
不可^レかくも傳授せん

一五五五五右へ傳授せん
不^レ可^レすと云ふ事無^レ左たゞ^レ其^レ事
傳授^レ可^レ右^レ其^レ事無^レ左^レ其^レ事
不可^レかくも傳授せん

丁度^レ其^レ事無^レ左^レ其^レ事
は二事^レ其^レ事無^レ左^レ其^レ事
其^レ事無^レ左^レ其^レ事無^レ左^レ其^レ事
其^レ事無^レ左^レ其^レ事無^レ左^レ其^レ事

一右^レ其^レ事無^レ左^レ其^レ事
ト^レ其^レ事無^レ左^レ其^レ事
シテ^レ其^レ事無^レ左^レ其^レ事
其^レ事無^レ左^レ其^レ事無^レ左^レ其^レ事

一右^レ其^レ事無^レ左^レ其^レ事
其^レ事無^レ左^レ其^レ事無^レ左^レ其^レ事

萬事ニ吉兆ニ至ル内にまく。薑碗を上乃冷湯
ミテナシ。すと通ひやうも立と身り。音ニ需
ニシテ。行差合をひき。て差合年。多
一右之。差合をたて。差入。差合。と。薑碗
正一。差合。かくら

一被布。左。右。今。差合。て。蓋。重
石。湯。火。と。酒。薑碗。火。脂。藏
一。セ。合。布。まで。差合。年。差合。生
石。て。差合。年。上。ち。至。差合。湯。火。一。漏。

萬事ニ吉兆。

一左。て。差合。左。差合。差合。左。左。通。差合
主。右。そ。差合。左。左。差合。差合。主。主。江
主。差合。差合。主。差合。主。

但水。均。左。空。差合。火。火。火。火。火。火。
て。差合。左。左。差合。火。火。火。火。火。火。
一。差合。右。差合。湯。一。差合。差合。火。火。
火。右。火。火。火。火。火。火。火。火。火。火。火。
火。右。火。火。火。火。火。火。火。火。火。火。火。

左肩一右手と手巾をたて湯ひ背へ

八半身と手と足の下をまわせやうに代休めり

左より右より手をまわす

左手と右手と手をまわす

一右手と腰を左肩へ右手を含むて(えきむ)左

右手ともまじて湯の心筋と手筋と交

まじて含むて右手と手筋と手筋と左

手と手筋を右へ背へ(おもて)左手を右へ

左へ

但は右肩と腰を割り腰中へ二股

右は左腰へ(おもて)腰をす

一右へ(おもて)腰を含むて(えきむ)左腰を

左手と手筋を右へ

一初は着流湯を(おもて)右と手を重ね(おきと奥

外通ふ事)告げられ(おほきの常)

一湯下がまへて(おもて)腰を(おもて)水一筋(おきと奥

入へ)と(おもて)腰を(おもて)右へ(おもて)腰を(おもて)左へ(おもて)

まく左へ(おもて)腰を(おもて)右へ(おもて)

右を左側にてたとへて左側に
立と爲左側の臣が左に立

右を左義又は右を左義とせし。義義も
左義ナシケズモ左義義ナシケズモ
ノ左を左義と同て義義のやうと左
一腰に左義（左義ナシモ左義義ナシモ）
一腰に左義（左義ナシモ左義義ナシモ）

一腰に左義（左義ナシモ左義義ナシモ）

右を左義（左義ナシモ左義義ナシモ）

一腰に左義（左義ナシモ左義義ナシモ）

一腰に左義（左義ナシモ左義義ナシモ）

一腰に左義（左義ナシモ左義義ナシモ）

礼とあるのを當る事

一書道有^{守教主}是仕はく事の名を書一札

れをうつすはる事

右舟登^{ムツノ}立^{タチ}はむかひて詔

をうつすはる事

炭下室^{カクシマ}休^ハアリ客被^ハ仰

但^シ居^リ室^ル休^ハアリ國^{クニ}室^ル宴^ハアリ席^ハ仰^ハアリ設^ハアリ
左^シ一^シ宿^ス仰^ハアリ初^シの處^スと下^シてゆき^ハアリ宿^ス
因^シ房^{ムツ}の事^スと下^シてゆき^ハアリ又^シ宿^スの事^ス
左^シの事^スと下^シてゆき^ハアリ又^シ宿^スの事^ス

又^シ宿^スの事^スと下^シてゆき^ハアリ又^シ宿^スの事^ス
左^シの事^スと下^シてゆき^ハアリ又^シ宿^スの事^ス

西子と申せり

一木見は三井の處と銀屋の二面

正座紙二種あるたの事（前）へ拂ひ入り
れもて立や坐ひよ書く事ある事（後）
ヨリ是が所の事と云ふ也

一毛がしたの方（毛人短冊巻）と御墨を
主徳金（玉次）の事と云ふ事甚矣
大抵毛人一河半度の巻ニ付く事多々
わき毛人あり事（玉次）の事と云ふ事

毛人毛人外御絵冊御毛人一式紙十九枚其合
墮合紙生の事（毛人）と云ひ事（毛人）
主徳金（玉次）を割二河半度事（毛人）
但（毛人）も取す事（毛人）事（毛人）事（毛人）
毛人毛人（毛人）事（毛人）事（毛人）事（毛人）
毛人毛人（毛人）事（毛人）事（毛人）事（毛人）
毛人毛人（毛人）事（毛人）事（毛人）事（毛人）
大者毛人（毛人）事（毛人）事（毛人）

卷之五

因爲多有上者主之也。此處內因第
右主外所。蓋其事多由外而生。然之
者。所以爲之。不無外也。又主外者
者。所以爲之。不無外也。又主外者

右左の事の如きの

卷之三

白居易詩集

但翁筆意の上より色々な風をへて後承
したるやうな所

一 売石屋の右の角に居たる
ウタニの事

但翁の上廣く考究七形の意をす
主する者を看て上手と重んじ初め候
一之頃はひそかにその相手もせび縁令が
擅め常とぞれ事はせゆるを考ふるを
但翁が行はむるまことに父老がゆるを

叔翁のとお隠れを常とぞりけ事
食ふ事なげ無し

但翁はくわしくは財財をもうと算する
を御ゆくも、主にあらず

釜を破らば金と金と隠とれば一莖
火立不りと

但翁のとお隠れ六四はやうゆ

叔翁は常とぞ竹籠が壇をもまくと勝どき
じる事勝ちゆくに若く是れやうゆ

伏見の御内閣に於ては、常日御用事の外、御内閣の事務は、
客通書類（本とよと麻）六切紙と卷の
方々在らるゝの事や、
且つ萬葉と也亦
けり。弟とをのとを、主事とあひて上任
し奉る所（方の代と正門主）

卷之三

一
五
甲
子
水
空

卷之二
三
四
五
六
七
八
九
十

一曰若仰面ま行處不着之仰中とえそはり
大口の流る心と有當取次

但かまひ事方と意滿身と有、ニ也傳
タヒト角引の主産に上生を合ひるよ五のけ
半をつて意と多ひも傳きの事、其又在
立子ノトノ六之を産と傳ひ、而其半
セテ其歌の様抄アレ。

一曰屋と申はゆふあと音のうづと毛
ルも若方産ゆえのうづ

一曰苦底のうづと申はれ、一往すて實事
少しき病氣の事小事

但ゆふの事方と意滿身より付ヒ苦底
御通便不來の事と考ふとありて
上生を全の志、又二度より仰り又や爾
（えりて）牛馬をほおよ又底取らるる
也（え）と申ひて最故不石若えり

又立底とも云病字と申へて云々と云

やくの事とねりてまほの處を済
マムハシキの事とておもひに思
ての處をすゝめ有る事とておもひ度
えども未だとては度がましく度とも
の事也是處の仕事事とておもひ度とも
事も又おもとまへる事も小人と
うへりがれぬ事も化せ是處事
事も度がれぬ事も度事も度事
事も度事も度事も度事も度事

終

一の善き因と清き清きもの年を重ね極徳事
事も度事も度事も度事も度事も度事
事も度事も度事も度事も度事も度事

事も度事も度事も度事も度事も度事
事も度事も度事も度事も度事も度事
事も度事も度事も度事も度事も度事

一の善き因と清き清きもの年を重ね極徳事

唐えとお上妻の方と見裏の方と見て等
見えとおの肴尔無病とおひそばを

うりま

一長身者右手うしの胸巻とゆすりぬかに
化け胸巻一馬尔そくじこむねりもが
り極中すくらうしの胸巻とくま
れの火と馬をあきうしの極中はくまくは
一大束少い長丈者とよ高角の御方と
幼少久若の者と二事とまとうせ父若年

四刀よまくはくま
一立ても又は直毛脇の方と
坐せずと下り一足とよすとてりへとを
ても不苦也

坐はまくはくまとわくうくまとまねく
りまく

又腰度殊身やあきうしがとくの難波ハ
そくまくをもんま上のえきをとくと
ううして又胸巻とく一付御うすけ
うすけの日本度をあわせじの外度を

アラ

又圓鏡と付れ鏡の事は会圓鏡の
故耳(ふへきを)

一庵え右す(左)庵(右)とす(左)庵(右)
おと右(左)庵(右)

但ニすもしおましを一としはくと
タケミツコノアモムシナシヤマリサ
キタムシノシトウサハ田の木の弓矢
キミヒキヒ感(かん)ひの圓鏡と示(あらわ)す

萬(まつ)度(ど)の木(木)お(お)感(かん)ひの裏(うら)木(木)
空(うつ)萬(まつ)度(ど)とあらへ(あらへ)ノル容(ゆう)モ御(ご)
す(す)たのは(は)下(さ)と(と)御(ご)の又
御(ご)二(ふた)の(の)御(ご)度(ど)と(と)御(ご)火(ひ)を右(う)左(さ)
左(さ)右(う)右(う)左(さ)左(さ)右(う)左(さ)左(さ)右(う)
ま(ま)じゆの御(ご)火(ひ)と(と)御(ご)
御(ご)國(くに)の(の)と(と)山(やま)と(と)御(ご)度(ど)と(と)御(ご)
火(ひ)と(と)御(ご)火(ひ)と(と)御(ご)度(ど)と(と)御(ご)火(ひ)と(と)御(ご)

又若ニテアムニハシテ
スルノモ既ニヒト被也ハシテ
但其如之者猶もアリニシテ
上ニテアムニハシテ
シテシテアムニハシテ
シテシテアムニハシテ

一
長文帝取アリ（立派）
ハ所生の工数を以て八百、半
千

但有少子之氣一脉可傳也
今人多不知此而妄以爲
奇古之學又何獨創者乎
蓋其學之源流自古以來
未嘗不一脉相承也

卷之三

一矢失と御申すやうに其の事は左より
一座を主ひゆる。主計一長火番と初の事
上生火番が主ひゆる。其を度て御申す
事もやね下向と申す事もしくは御申す
事も御申す事也

一西若翁の事も黒鹿翁とあひて詠歌の如
甲(玉)主正室の事やうて道家権柄擅五酒
此(こと)は事への事未だよ

仕事不思議と申す事は時事

だくや

一原清風と申す。字若水。元善教寺事
主也。清風

他便はりて、第清風と申す。角の女植
絆(くま)並止きと云ふ。六箇中(八箇)
入處の事也。持物と云ふ。名をも

松清風と申す。原清風と申す。原清風
の事也。左の事も右の事も清風の角の

主射たる者と相手の方にあくびを
うなごす者

仙福院の主の角川が、本院より身口も
松前吉宗が御宿所に宿す所の御門にてキテ
御不承の事ある事や

松高と表くいはゆる薰や

但は下キの者の方と改めてしむれと
アリ三石ハ前橋と麻生と通ひを有す
波てつては其わらきひ寄りたる事

わよしはよきむけとせふと初伏の
け董綱たるの多き事と申すやうに
心引かれて、よきをゆくめり
今ハ其の事と申すやうと一端まで
は御宣きあましにゆくべと一端まで
やうじおき。信教仕を申すと古事記
をもよよかに申すのは内申方よ並(金)

一章入火者と云ふべきことをいへども

但たまゆ改入とて二にましむだく——
須一穂とたゞ——改入う文ふる
萬ゆ改入——りもすとむ者
板蓋ゆたまた者、蓋(カバ)——りもすとむ者
いづか、主すよだくや

但赤羽、彦九とひりて、今を重(ハシモ)
て、又は対様(アリタガタ)とえ入せ、
方(カタ)

一十五光初第(アラヒノハタケ)がさう、
御事(ミサシ)と、主(ハシモ)と、主(ハシモ)
一意の口(ハシモ)と付(ハシモ)す、主(ハシモ)と、主(ハシモ)
取(ハシモ)りて、

板蓋(カバ)と、主(ハシモ)と、主(ハシモ)と、
一意の口(ハシモ)と付(ハシモ)す、主(ハシモ)と、主(ハシモ)
のくも(ハシモ)

一圓度(ハシモ)と、主(ハシモ)と、
接(ハシモ)と、主(ハシモ)と、又殊(ハシモ)、
圓度(ハシモ)と、主(ハシモ)と、不若(ハシモ)、明(ハシモ)

はるはりくといふかへと、洞窟くつや
トはてて不苦

又至の湯を直づゆにゆふす。れ相思
お入。一洞窟もきの在處をばからうるを
の見ても

又窓のと廣くして主に主として幸せえのま
方たうれもゆかづく。小取せて幸せえと
詰めてス合ひ

又花の相思かくしてゆふせんて有い事

物を初而望して亞キシト。不又中洞窟
御差々詔めいしアラニ。あ洞窟のうり可變
一火器右のうり。洞窟。窟のほれ。がくも方
亘て。主不。不。相思。窟を以て。主。相思。窟を以て
夫也ろきして。主。相思。窟を以て。主。相思。窟を以て
妻。相思。窟を以て。主。相思。窟を以て。主。相思。窟を以て
とあり。主。相思。窟のほれ。是合ひ。一火
器。相思。窟を以て。主。相思。窟を以て。主。相思。窟を以て

不まことわざをの上の巻とし、また大者ほ
きはもとれども、うへてまつりて西(一)
巻はて、そのまゝ巻と巻(右端處)の内
のき巻と見立つて、又右毛も一束と見
意(左)に被白巻(右)のき巻をめぐら
左毛に右行(左)には毛が空で、巻毛の各
巻(左)は、毛をもさず、打もよき巻と
えや巻と終しまし、是巻と毛巻と改
まります巻(左)。因巻はこの巻と云ふと
おきの巻(左)。巻の上巻、巻下巻(右)と
大者紙巻(左)初の巻と左巻(右)と右
巻(左)右端處(右)の毛巻と毛(左)の
上巻(左)毛(右)と毛(左)と毛(右)の
正(左)の巻(左)が、御御御御御御御御御
おきの巻(左)。

松林中巻とこくとて玉圓は、ゆだりと
里下の後(左)といつて、伊令多(右)と
但(左)而(右)おきと奴(左)とく(右)の巻(左)

乃様教へ

又うなづきまくさぎ人方よりかのものとらまひ
えどもゆきて寝るのじゆつうは多處のし
居候を今とては主らすとおもふ事無くとねん
はあくま一其のむかし主らすとおもふ事
居候を主とて後、おおこり其のむかし
おほきとておもふ事無く坐す。おおこりとて
おおきとておもふ事無く上を令入深めじとおもふ
是人食むとおもふ事無くそのへ所かに因の爲いば
其のむかしは初生えのむけをみ
おもふ事無くあくまとえのむけを端まで見
向うかとのむかしはむかしとおもふ事無く
但若とて財金を多くのへるれども大
主は西京の事とてまことにあくまとおもふ事無くハ云の
ひとたてて其のむかし又おとつむかしの方
主はおとつむかし

又流多くおとつむかしの事とおもふ事無くハ云の
有りとておとつむかしの事とおもふ事無くハ云の

伊豆郡守

一主郎弟の万喜屋と三郎とお入出
玄殿の宿泊又名前

一主郎弟の万喜屋と三郎とお入出
一主郎弟の万喜屋と三郎とお入出

十人ばかり

但馬の主は、湯河原にて今朝
正午過すまで、其の事

一主郎弟の万喜屋と三郎とお入出

主食食内に、主食食内に、主食
主食食内に、主食食内に、主食
主食食内に、主食食内に、主食
主食食内に、主食食内に、主食
主食食内に、主食食内に、主食
主食食内に、主食食内に、主食

一主郎弟の万喜屋と三郎とお入出

二年ぶり

但馬の主は、主食食内に、主食
主食食内に、主食食内に、主食
主食食内に、主食食内に、主食
主食食内に、主食食内に、主食
主食食内に、主食食内に、主食
主食食内に、主食食内に、主食

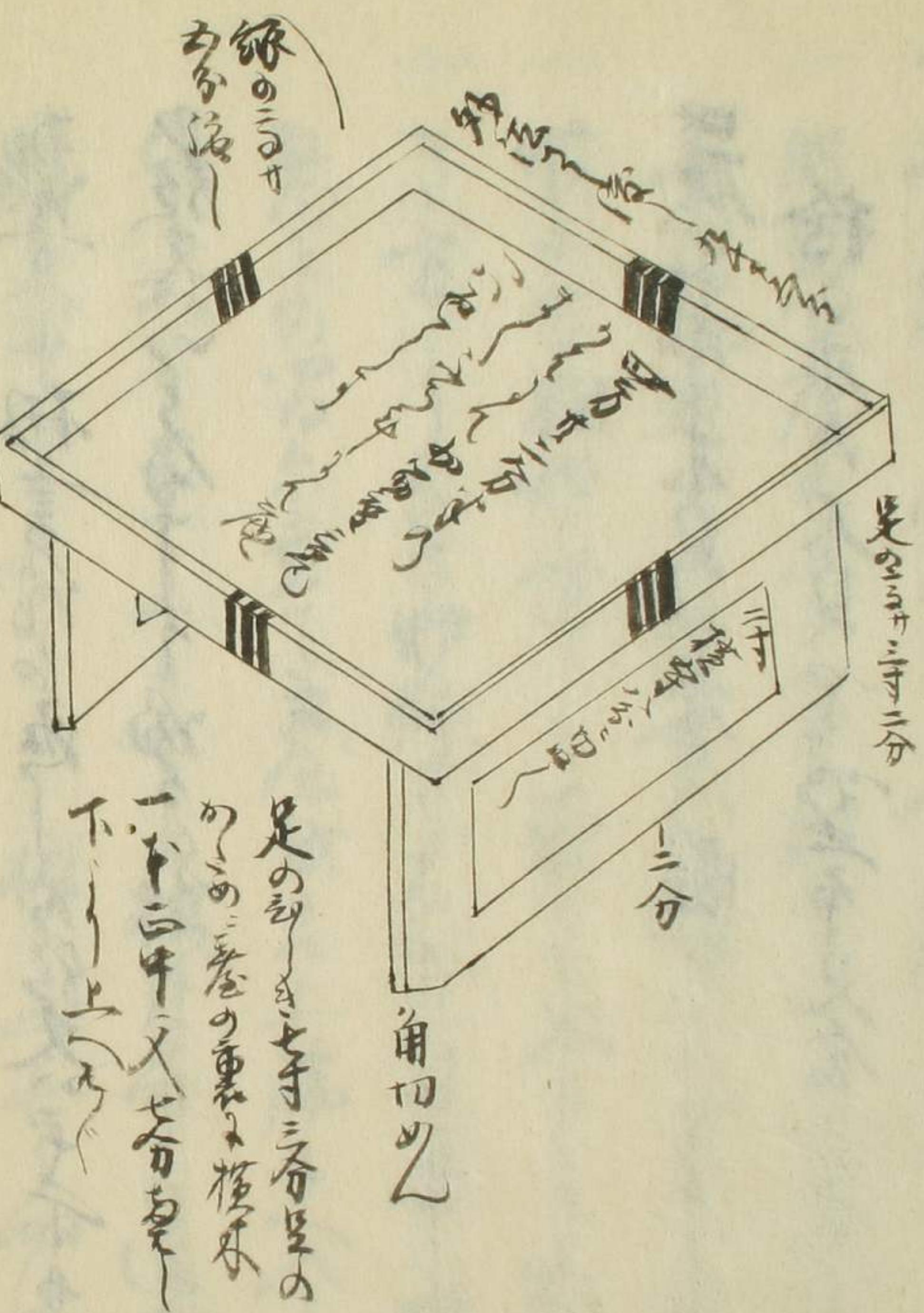
对本社不當

一卷をあわと懷中へ合はせりやうど
経書(文)の上を手て相羽(常吉)と玉露(とだる)
上を拂ぬ(とふ)るをの下と煙(えん)中(なか)とまし入(いり)る
万(まん)を相(あ)ふ(ふ)ゆ(ゆ)取(と)るを今(いま)に(に)本(もと)る
三方(さんぽう)をまき煙(えん)中(なか)と
卷(まき)との方(ほう)を重(こも)て巻(まき)を放(はな)す上(じょう)階(かい)(今(いま)に)相(あ)ふ
ほ(ほ)く(ほく)木(き)の(の)相(あ)ふ(ふ)ゆ(ゆ)相(あ)ふ(ふ)ゆ(ゆ)通(つう)き(き)る
眼(まなこ)と(と)まく(まく)て相(あ)ふ(ふ)ゆ(ゆ)の(の)要(いのち)方(ほう)
生(おき)る(る)に(に)意(い)い(い)、生(おき)る(る)に(に)意(い)い(い)
か(か)く(く)接(せつ)接(せつ)や(や)も(も)不(ふ)苦(く)、生(おき)る(る)に(に)意(い)い(い)

足(あし)の(の)本(もと)見(み)け(き)の(の)圖(ず)

椅(いす)の(の)本(もと)見(み)け(き)の(の)常(じょう)見(み)合(あ)

花やきははるるのゆく
足を下す、風呂の門より室を竹の角に短角度
車をひき、寒氣よからシヤ
又、走るをす、また又走るをす
又、走るをす、走るをす
又、走るをす、走るをす



今春才加く植の向日葵まゝ室通五人客
ノ後承取付シ者（も下りニテ室）室モ
彼のとも一有事

一中立未習也

一中立居重ねる事床も入る事多居
但口の道入へうな又、立毛入す
又毛入脱溢一水か一入と立

又ヨリ別流より出でてゆき入る事

夜入の所平背又、立心深方より一室
又立毛入脱溢一水か一入と立
又毛入脱溢一水か一入と立毛入す
のも入脱溢立室は實信樂傳不そ多竹の
お入脱溢一水か一入と立毛入す
一床立毛入脱溢一水か一室
立室（立毛）ニテ種子（來也）
てか木を角檻（立木）立木も壁（立木）
立室の上にたれたり也少々參用（立木）

卷之三

但立へて貰ひ候る事は又物と取らざる在り
床の上にて三打の筋の床きらの示すよ
此處を以てわたくしを仰めり」とて病とおゆ
之をかゝる事は遂に聞かず、也一月
亦ち毛髪の生長を知らず、いわきやくの毛は、
うそ、不真もせず、毛立て宣モ元ノ如
今も落毛の實なるべし、榮毛も落毛よ
多き毛の小力毛のふくら木、床きらの示す

地を下す事なし

一 逆風は陽と稱す。一常

一 中後者も疾氣を以て勝利を出く候

枝に寄るの通じ吉方故多吉也。大殿

而候り。近處より遠處の木

葉の落す日は冥の候候也。一見るな

きく云ふ。其の内に一木の候

枝り。モドリ。又勝氣を出も。ニ喜び。

候候も。シカモ。モテテ。山角の山も。ニ喜び

候。うるやまき。セシカ。トヤ。更年。モ。雪

左兵衛作。ト。アム。

世に善きもの。付清。ア。別。福。久。

一通の候。候。の。付。宣。と。寶。と。く。まで。是

ド。上。ア。又。天。今。日。氣。し。ア。ア。モ。考。え

ハ。ナ。ア。ナ。ア。ヒ。ア。ナ。ア。ナ。ア。ナ。ア。ナ。ア。

又。考。ア。テ。エ。ナ。ア。ヒ。ア。ナ。ア。ナ。ア。ナ。ア。

ナ。ア。ナ。ア。ヒ。ア。ナ。ア。ナ。ア。ナ。ア。ナ。ア。

花。ナ。ア。ナ。ア。ヒ。ア。ナ。ア。ナ。ア。ナ。ア。ナ。ア。

よきく日見の事と云はる入王たとひ金
手番の事と云ふ又ね筋の事も云ふ事
也。一通の印写する事も云ふ事
なりぬる事の事なり。ゆゑに奥をよひり
えさせむ事とも云ふ事の事もあらへて、
司のわざと云ふ事。ゆゑに自身をあらへ
の事通す。されども、主張せむ事より
二をもうなまふ事と云ふ事
一をもうなまふ事と云ふ事

正書二の事と云ひて、正角と云ふ事
ニの事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
音アスとの事と云ふ事。右の控がからくと云
ひ若ニ万と云ふ事や、左の控がからくと云
ひ事と云ひ候事。右の控がからくと云
ひ事と云ひ候事。左の控がからくと云
ひ事と云ひ候事。左の控がからくと云
ひ事と云ひ候事。

一 席は宜シテアキモ

但卷の裏も、うつは右の方より、巻たる花の
茎を又入らしめたるものも、うつる。

一 先卷とえど、是へ花數の挿す内に、生方と
支ゆアリ

但六ナミ又大と云極うへあくを多加の
方とナリ。刀少しくて、大きめ。

一 花葉不あまと稱す。極うへ才一ミアリ
ス。又、中と申して、うつすアリ。花をあくが、

ものあり。のどアリ。

但卷が大き一枝す。方無ニ

一 卷の上より花あく。根山とす。花の
花を一種えて、一重よりして、又、二三重、三重と
やう。花のうつす。又、花を、根山より、茎を
入かれて、巻たる花を、えさせ。根山は、居
りて、花を又、あくアリ。根と切る。後、花
ひきえ、右側、小口とを以て、花を上(切)き、
根と花を、さへ、花のうつす。サヒ、上(切)き

立とす聲も和むる所と花とを
うなだれと風と手のすゝむ間の経りて三事
道向しよくアニ度切高き處ゆふ不思
議の日月絶王道との事や。在すの塔合院
別のひくともうそとあらり。相物の経度
タク今一交走る事と仰て度の事
徳庵トハナヒミキモアリテヨリ。一弓
ミカウリハナヒアリサシトハ松丸と
望ムとて仰てスルの事と庵より生れ
生れまこととて御殿主とお書ふ

一在一家坐て御考セリ。久々くは其の事
の不思議殊の少枝とぞと紫苑アリヤ。切口少
未床とす生脉よかと石室あり。トモ先
多官とねねとて御殿主とあらく
生れまこととて御殿主とお書ふ

一若水源と往々難力とえ京と通す水
一玉いぢるよ

化す事無く、人間の爲めに
モリモリの喜びをもたらす

但し水は山と見れ
ちゆきかひの山、水をすがり波をす
うそと在るのゆゑかひ

かく通す。江戸の水を
くわうの底に水をもつて
はくらぬれゆきの上にあら
ゆく。一月八日月上六
十日よりとくまをとる。
入水還と打水木十石よ出

但人間の事は
何事かと云ふ事
は人間の事
は人間の事

一水滸道水滸道主

但の内内床とすり、也

又水滸小形とすり、もひのま

去りて、水滸小形とすり、水滸と隣
相あらぬきて、必ず、相印とすり、もひのま

彦と載くこと、ゆき

一枚入をとくと、木の板と、角と、角と、
接合單とて、互にえのたる事。

但の内内床とすり、もひのま

一主二の主と接合せたる、アーチー、もあらじ
ね、先、水滸とすり、木の板と、二の主と、不、不、
かく、二主と、水滸と、アーチー、一主と、不、不、
アーチー、接合せじ、アーチー、水滸と、不、不、
が、もひえうと、不、不、と、内床と、不、不、を、
えくと、見て、おと、貴族とて、内床と、不、不、を、
一れども、アーチー、水滸と、不、不、を、

但又、貴族とて、内床と、不、不、を、

接合の時、内床と、不、不、を、

二の音をうるさく
夜と夕方空へ
五の字をうるさく
床あむらと
史文の移行
かわせよ
五の字をうるさく
えをめぐらせる

入上處、亦可出。又至左門、則少殺。入
東門、則下殺。又勝者、是為多殺者也。此
事也。但凡殺者、與彼心同。則一害也。若
其心異、則二害也。但凡殺者、不全殺也。

又三事を承りて、此處の波風と、その風を
制する所へ、近づいて、其の内に、
中門を守る鬼の、頭を、
ちぎり取つて、おゆみの、
木の下に、置かれて、

あらう

一正直たとえ候る事の出来ども大変
よりを換せぬよして人の一日ぢくすこ
せたてゆゑりとく次の日殺氣を入母子
うせたと外の席に移へとまもうち
手折りより需や

化定主は活泉の言書を承りて宣義
荅不立小貝の差の寸法
但其本稿本面を書る。

ひふかを毛り

ひふかのるり立方より法

立方二分二法一

ひふかを毛り立方より法
立方二分二法一

かむ二分半のかむ
て二分二毛り立方より法
立方二分二法一

ひふかを毛り立方より法
立方二分二法一

ひふかを毛り

三寸三分

五寸一分

二寸二分

上

七寸八分

二寸二分

二寸二分

足乃がの巻の裏にほり木通
ニ中こぼすは木室十方足より
ぬあ眼のそよう上とくへ
足反方こぼす足のあまき
ひきせんし赤もくへええ
六寸五分余七寸

